



Sekishitsuwo
石室を
いろいろ
原始絵画
GenshiKaiga

耳納北麓の装飾古墳



花開く古墳文化

古墳時代（3世紀半～7世紀末）、耳納山地北麓には数多くの古墳がつけられました。特に6世紀の後半（西暦500年代後半）になると、山麓の各所に直径10m～20mほどの小型の円墳（平面形が円形の古墳）を密集してつくる、後期群集墳が発達します。その数は現在確認できるだけでも400基以上、これまでに消滅した古墳や未発見のものを考えると、当時は1,000基を優に超える数の古墳が存在したと考えられます。

古墳は本来、地域の人々の中でも有力な者にしか築くことのできない特別なお墓です。この耳納北麓エリアに、これだけの数の古墳が営まれたことは、当時多くの人々がこの地で生活していたことを示すものであり、その背景には、筑後川と耳納山地が生み出した肥沃な平野部の豊かな実りと、古墳に使用する石材を容易に調達できる環境がありました。

装飾古墳とは

装飾古墳とは、死者を葬る部屋である石室の壁面や石室内部に納められた石棺に彫刻や彩色などによって装飾を施した古墳のことです。古墳は全国に16万基以上が存在するとされていますが、そのうち装飾古墳はわずか600基ほどしか確認されておらず、貴重な歴史遺産であるといえます。

筑後川流域、特に耳納北麓エリアは全国的に見ても装飾古墳が集中する地域として知られ、中でも久留米市には福岡県下で最も多くの装飾古墳が存在します。

耳納北麓の装飾古墳

6世紀前半頃、筑後川中流域に勢力をもつ一人の豪族が、自らの墓である古墳（日岡古墳：うきは市）の石室内部に壁画を描くことを始めました。赤や緑、青などの顔料（絵の具）によって、舟や、刀・靱・盾などの武具類など、様々な文様を描きました。特に、大胆に描かれた同心円は、日輪や鏡、あるいは射撃の的ともいわれ、この後、耳納北麓一帯の有力者の古墳に広がっていく装飾壁画の主要なテーマとなりました。

田主丸から草野にかけてのエリアに残る装飾古墳は、特に同心円を壁画の主題とする古墳が多く、一つのグループを形成しています。同心円を大胆に描く下馬場古墳や寺徳古墳。中原狐塚古墳では同心円とともに、数多くの武具や人物などが描かれています。

古墳の壁画は、古墳時代に生きた人々の精神世界を伝えるものです。芸術家の岡本太郎は、九州の装飾古墳の壁画を評して、「その土地で、その共同体の中から自然に、切実に生まれてきた表情だ。それは今日の芸術のポイントから言っても、より根源的な意味と強烈な広がりをもっているのである」と述べています。

あなたは、古墳時代の人々の手によって描かれ、1,400年以上の時を経て現在に伝わる壁画を目にするとき、何を感じるでしょうか。

